

看護学生の職業社会化に関する研究

白鳥さつき

本研究では、看護学生の職業社会化の特徴を把握することを目的とし、看護学生と教育学部学生の1年生、4年生を対象とした調査を行った。職業レディネス尺度と東大式エゴグラムによる調査を行い、関連を見た。結果は1年生では看護専門学校生が職業レディネス、エゴグラム得点共に最高値を示した。4年生では教育学部学生が双方に最高値を示し、分散分析結果でも有意差が見られた。看護学生の最終学年では1年生より職業レディネスが低くエゴグラムも低いスコアで、職業的同一性は促進されていないことが示唆された。看護大学生は進路を看護師に限定せず、興味や適性を広い領域で考え始めていると考えられた。専門学校生では自我状態との関連では、他者の影響を受けやすく、自己を否定する傾向が高かった。また、教育学部学生が実習直後に高いレディネスを示し、職業を現実場面で体験することが、社会化にとって重要であることが示唆された。

キーワード： 看護学生、職業社会化、職業的同一性、自我同一性、看護教育

はじめに

青年期における職業選択は、性的同一性や自我同一性の確立とともに重要な発達課題の一つである。職業選択は自分の生き方、価値観、興味、能力、性格などによって方向付けられ、発達段階に応じて様々な試みが繰り返される。従って1回の選択行動で決定されるものではない。Super¹⁾は自我と職業を探索するこの時期において、初期の頃に望んだ職業興味が一貫して就職まで続いた例は少ない、と指摘している。自分に適した職業を選択するまでには、自己の能力に対する様々な試行、好みや興味の追及、などがあり、その過程で現実からのフィードバックや社会的諸要因との妥協・調整があると考えられる。

一方、看護職を目指す学生は、国家資格を得るために専門の教育機関に入る必要があり、専攻はそのまま将来の職業に結びつくことになる。つまり、一般の大学生が就職に際して職業人としての規範や行動様式を内在化させていくのに対し、看護学生は入学と同時に看護師へと自我を同一化させていくことが求められる。このことは、看護学生の自己概念や職業社会化とどのように影響しているのだろうか。看護教育の大学移行化が急速に進んでいる現代において、学生の職業に対する価値観も多様化していることが考えられる。大学における看護教育は、様々な入学動機を持ち職業への価値観を異にする学生達に、どのような看護師像を描かせているのだろうか。看護師への社会的役割期待は高まる一方である。職業へと社会化を促進させる教育的関わりは、今後ますます重要となるのではないかと考える。

I 研究目的

看護学生の職業に対する意識を調査し、人文学系学生と比較することで職業的社会化における特徴を考察する。

II 研究方法

1 対象

山梨医科大看護学科1年 59名 (男3, 女57),
平均年齢 18.68±2.19歳,

山梨医科大看護学科4年 60名 (男1, 女59)
平均年齢 21.95±1.85歳,

K看護専門学校1年 71名 (男0, 女71),
平均年齢 18.27±0.79歳,

K看護専門学校3年 55名 (男0, 女55)
平均年齢 20.58±1.40歳

M大学教育学1年 46名 (男20, 女26)
平均年齢 18.40±0.69歳

M大学教育学4年 42名 (男20, 女22名)
平均年齢 21.08±0.78歳

以下、各大学(校)をY大学、K校、M大学とする。

2 期間

平成13年4月～平成13年10月 6ヶ月間

3 調査内容

1) 若林らが開発した職業レディネス尺度²⁾を用いた。この尺度はSuperやCritesらの考えを参考に「職業選択への関心」「職業範囲の限定性」、「職業選択の現実性」、「職業選択の主体性」、「自己知識の客観性」の5つの下位概念で構成され30項目からなる³⁾。それぞれに4段階尺度で評定を求めた。この他に学生の属性、および大学選択に関する項目を加えた。職業レディネスの5つの下位概念について以下に説明する。

- ① 職業選択への関心；職業選択を重要な課題と考え、真剣に取り組んでいる度合い。
- ② 職業範囲の限定性；ある範囲の職業に対して自分の興味や関心が結晶化されている度合い。つまり、興味に関連のない多くの領域に拡散しているか、特定の領域に限定されているかの度合い。
- ③ 職業選択の現実性；職業の条件と自分の能力や適性との適合関係を認識する程度。

④ 職業選択の主体性；選択において自分の興味や適性を優先させる度合い。逆に両親や周囲の意見に従う度合い。選択の自己の責任や主体性の必要性を自覚している度合い。

⑤ 自己知識の客観性；自分自身の能力や興味をどの程度客観的にみているかということ。自己の限界の知覚、適性の正しい把握、自己の可能性の現実的な見通しなど。以下、「関心」、「限定性」、「現実性」、「主体性」、「客観性」とする。

2) 新版東大式エゴグラム⁴⁾；職業意識と自我状態がどのように関連しているか調査した。エゴグラムは Eric Berne や J.M.Dusay. らの交流分析の理論を基礎として作成された⁵⁾。交流分析の基本は自我状態モデルであるが、自我状態とは、思考、感情、行動パターンを包括したものであり、「親 (Parent; P)」、「大人 (Adult; A)」、「子供 (Child; C)」の3つに分類されている。エゴグラムは自我状態を5つの基本要素 (CP; critical parent, NP; nurturing parent, A; adult, FC; Free child, AC; adapted Child) で構成し、それぞれが示す関係で自分や他者に対する態度を判断する。以下にその概要を説明する。

CP; 目標が高く理想を追求し、自分にも他人にも厳しい。基本的には他者否定の構え。

NP; 他人をいたわり、親切で寛容な態度を示す。基本的には自己肯定の構え。

A; 事実に基づき、物事を客観的かつ論理的に理解し判断しようとする。平等・公平な評価をする自我状態である。他の自我状態の調整役でもある。

FC; 感情や欲求を自由に表現するので行動が優先する。本能的、自己中心的で好奇心、直感、創造力と関連性がある。基本的に自己肯定の構えを有す。

AC; 周囲に適応していく従順な自我状態で、親のしつけや教育の影響を多分に受けている。対人関係では非主導的で“自分がない”タイプ。基本的には自己否定の構えを有す。

4 調査の手続きおよび倫理的配慮

学生に研究の目的を説明し、同意の得られた学生に対して無記名で実施した。

5 統計処理；統計ソフト SPSS, Ver10,0 を使用。

III 結果

1 職業レディネスについて

各科の学年別の職業レディネス得点平均値を表1、表2に示した。分散分析後の多重比較は Tamhane の検定を行った。表3は各科学年(1年と4年)の値のt検定結果である。大学専攻(看護および教育)をどのように選択したかという問いに対して、「自分で選んで決めた」と答えた学生はY大学1年44%、4年45%で、K校1年80%、3年75%、M大学1年77%、4年74%であった。その他「高校の成績で教師に特定の大学を勧められた」、「両親の勧め」、「医師・薬剤師になりたかったが無理だったから」などの理由があった。

各科1年生の比較(表1)では、職業レディネス得点が最も高い値を示したのはK校であった。次にY大学、*M大学の順であった。有意差は表に示すとおりである。

その後の検定では5%の水準で「関心」がY大学>M大学、K校>M大学、「限定性」でM大学>K校、「職業選択の現実性」でY大学<K校、「総合得点」でK校>M大学に有意差が見られた。

各科4年生の比較(表2)では職業レディネス得点が最も高い値を示したのはM大学であった。以下Y大学、K校の順である。その後の検定では5%の水準で、「現実

表1 各科 1年生のレディネス平均値と分散分析結果

	関心	限定性	現実性	主体性	客観性	総合
Y大学 n59	19.9±2.5	16.2±2.4	12.3±1.8	18.0±1.6	2.5±0.7	69.0±6.7
K校 n71	20.4±2.7	16.9±2.6	13.2±1.6	18.0±1.8	2.8±0.7	71.2±7.1
M大学 n46	18.2±3.1	15.5±3.1	12.5±1.9	17.5±2.1	2.7±0.7	66.4±8.4
F値	8.945	4.107	4.261	1.22	1.854	6.118
検定結果	***	*	*			**

***P<.001 **P<.01 *P<.05

表2 各科 4年生(K専3年)のレディネス平均値と分散分析結果

	関心	限定性	現実性	主体性	客観性	総合
Y大学 n60	18.2±2.9	15.9±2.5	12.7±1.5	17.3±2.0	2.7±0.7	66.9±7.7
K校 n55	18.8±2.5	15.4±2.6	12.5±1.7	16.3±2.5	2.7±0.7	65.1±7.8
M大学 n42	18.7±3.3	16.7±2.6	13.6±2.0	18.0±1.9	2.8±0.8	69.7±8.3
F値	0.543	2.933	4.845	7.674	0.371	3.895
検定結果			**	***		*

***P<.001 **P<.01 *P<.05

表3 各科学年間のレディネス平均値の差

	関心	限定性	現実性	主体性	客観性	総合
Y大学 1年 n59	19.9±2.5 ***	16.2±2.4	12.3±1.8	18.0±1.6 *	2.5±0.7	69.0±6.7
〃 4年 n60	18.2±2.9	15.9±2.5	12.7±1.5	17.3±2.0	2.7±0.7	66.9±7.7
K校 1年 n71	20.4±2.7 ***	16.9±2.6 ***	13.2±1.6 *	18.0±1.8 ***	2.8±0.7	71.2±7.1
〃 3年 n55	18.8±2.5	15.4±2.6	12.5±1.7	16.3±2.5	2.7±0.7	65.1±7.8
M大学 1年 n46	18.2±3.1	15.5±3.1	12.5±1.9	17.5±2.1	2.7±0.7	66.4±8.4
〃 4年 n42	18.7±3.3	16.7±2.6	13.6±2.0 *	18.0±1.9	2.8±0.8	69.7±8.3 *

対応のないt検定 ***P<.001 *P<.05

表4 各科 1年生のエゴグラムの平均値と分散分析結果

	CP	NP	A	FC	AC
Y大学 n59	10.0±4.1	14.6±3.1	8.5±3.7	13.3±4.3	10.4±4.2
K校 n71	10.2±3.5	15.4±3.3	8.7±2.7	14.1±3.9	10.5±3.7
M大学 n46	9.7±3.4	14.3±3.1	9.2±4.8	13.6±4.1	11.3±3.8
F値	0.144	1.891	0.793	0.625	0.903

表5 各科 4年生 (K専3) のエゴグラムの平均値と分散分析結果

	CP	NP	A	FC	AC
Y大学 n60	11.0±3.9	14.0±3.9	9.3±4.1	13.1±3.4	10.8±4.1
K校 n55	8.9±4.3	13.9±3.7	7.9±3.8	12.3±4.1	12.3±4.1
M大学 n42	11.4±3.6	14.8±3.9	10.6±4.2	13.9±4.1	10.8±4.4
F値	5.584	0.657	5.460	2.193	2.296

検定結果

**P<.01

性」でK校<M大学, 「主体性」でY大学>K校, K校<M大学, に有意差が見られた。学年間の比較では看護学生はY大学, K校とも4年生(K校3年)で有意に低い項目が多いのに対し, M大学では4年生の方が高得点であった。有意差は表3に示すとおりである。
 2 エゴグラムについて; エゴグラムの値は表4, 表5に示した。1年生のエゴグラムは各科ともNPを頂点とした肯定的ストロークを示すパターンであった。どの項目も有意差は認めなかった。4年生のエゴグラムも各科の平均値はNPを頂点とするパターンであった。分散分析後の検定では, 5%水準でCPにY大学とK校およびM大学とK校に, AでK校とM大学に有意差を認めた。学年間の平均値のt検定結果は表6に示した。学年間ではY大学は1年生と4年生でどの項目にも有意差は認めなかった。K校でNPとFCが3年生より1年生

が有意に高く, ACが1年生より3年生に有意に高かった。M大学ではCPが4年生の方が1年生より有意に高かった。

3 職業レディネスとエゴグラムの相関について

職業レディネス総合得点とエゴグラムの各値との相関について検定結果を表7に示した。3学科ともACとは負の相関が見られる。レディネス得点と強い相関を示したのはK校1年のNP, FC, AC, K校3年のCP, NP, AおよびM大学のNP, A, FC, ACであった。

IV 考察

1 職業レディネスについて

教育学専攻, 看護学科とも進学が直接職業に結びつく, いわゆる目的養成の学部である。最近では医学部や教育学部などでも卒業後の進路を決めずに入学者

表6 各科学年間のエゴグラムの平均値の差

			CP	NP	A	FC	AC
Y大学	1年	n59	10.0±4.1	14.6±3.1	8.5±3.7	13.3±4.3	10.4±4.2
〃	4年	n60	11.0±3.9	14.0±3.9	9.3±4.1	13.1±3.4	10.8±4.1
K校	1年	n71	10.2±3.5	15.4±3.3	8.7±2.7	14.1±3.9	10.5±3.7
〃	3年	n55	8.9±4.3	13.9±3.7	7.9±3.8	12.3±4.1	12.3±4.1
M大学	1年	n46	9.7±3.4	14.3±3.1	9.2±4.8	13.6±4.1	11.3±3.8
〃	4年	n42	11.4±3.6	14.8±3.9	10.6±4.2	13.9±4.1	10.8±4.4

対応のない t 検定 **P<.01 *P<.05

表7 職業レディネス総合得点とエゴグラムとの相関

	Y大学		K校		M大学	
	1年 n59	4年 n60	1年 n71	3年 n55	1年 n46	4年 n42
CP	0.258 *	0.144	0.239 *	0.441 **	0.162	0.226
NP	0.407 **	-0.049	0.411 ***	0.461 ***	0.315 *	0.489 ***
A	0.318	0.265 *	0.281 *	0.421 **	0.172	0.463 **
FC	0.058	0.142	0.421 ***	0.176	0.274	0.459 **
AC	-0.239	-0.209	-0.428 ***	-0.329 *	-0.095	-0.438 **

***P<.001 **P<.01 *P<.05

が増えているという報告がある⁶⁾。Y大学の学生においても、看護職への道を自分で選択して決定した学生は半数以下で、明確な目的を持たずに入学した学生が多いことがわかる。しかし1年生では「関心」や「限定性」、「主体性」でM大学より高い値を示しており、看護師への関心や、興味領域がある程度限定されていることが考えられる。同じ看護を目指すK校の学生はY大学の学生とは対照的で、自分で進路を決定した学生が多く、職業レディネスのすべての項目で最も高い値を示した。このことはK校の学生が、早い時期から看護に対する興味や関心が結晶化されており、看護師として働くことへの価値を高く評価している結果と考えられる。

松下⁷⁾は若い頃からの「看護婦への憧れ」は職業的同一性早期完了地位⁸⁾を強く規定していると指摘しているが、同時にMarcia⁹⁾の報告を示し、ストレスに弱く、非現実的な目標を持ち、自尊心が傷つきやすい面も指摘している。K校1年生の高いレディネスは、看護を現実場面で体験した時に受けるフィードバックにより、極端に低下する可能性がある。早い時期の職業決定（特に看護職において）は、その後の自分の適性への積極的関与の有無によって、自ら選択した職業を「やり遂げる」こ

* Marciaによる同一性を概念化した考えで、自分にどんなイデオロギーや職業が適しているか、迷いや試行なくして両親や社会通念が支持するものへと自己投入していること

とができるかどうかに影響する。看護教育において、この過程には特に注目して、関わらなければならないと考える。

4年生で最も高得点を示したM大学は、1年生との比較でも「現実性」と「総合得点」が有意に高く、大学における体験や学びが職業への自信に繋がっていることが示唆された。3学科間の比較でも「主体性」、「現実性」で有意に高く、看護学生より社会参加への準備が積極的に順調であると考えられた。これは本調査が教育実習終了直後であり、学生の教職への意識が高まっていた時期であるためと考えられる。この結果は、古田土⁹⁾の報告している、実習体験の人間関係の満足感と教職志望の強さが関連する、という結果を支持した。M大学の学生は実習体験によって教師像に肯定的なイメージを持つことができたと思う。学生が職業を現実場面で体験すること、そしてその体験が肯定的に受け止められることによって特定の職業的役割を担うという意識が高まるものとする。

一方、Y大学の4年生は1年生との比較で「関心」、「主体性」で有意に低かった結果から、職業への関心や興味は発達の促進されていないと考えられる。松下¹⁰⁾は、大学の看護学生は教職など進路選択の可能性が開けており、臨床看護師への同一性形成を急ぐ必要がないことを示唆している。Y大学の学生においても、職業への興味領域が広がったり、自己の適性を改めて確認している時期であると考えられるが、臨床看護師を否定的

に考え始めている学生がいることも示唆される。K校の3年生の得点が学科間および1年生との比較でも最も低いという結果は、他と比較して特徴的である。これは松下⁷⁾の指摘を示唆するが、他にも様々な要因が考えられる。たとえば3年間の教育期間について、自我同一性の確立と職業を自己に内在化させるという課題を達成するのに十分であるか、などの検討の必要があろう。

波多野ら¹¹⁾は看護短大生の職業的同一性について、1年生では高いアイデンティティを示すが、3年生では看護婦の現実的な姿に触れて低下する、と指摘している。河村ら¹²⁾は短期大学3年生が臨床実習の経験を通して、看護婦を自分の生き方として積極的に選択している学生が多いと報告している。つまり、学年が進むにつれて職業意識が高まることを示唆している。今回の調査では波多野らの結果を支持したが、上記の2つの報告は短大生を対象とした調査であり本調査との十分な比較ができず、今後の課題となった。

2 エゴグラムについて

エゴグラムは全般的に高いスコアが安定した自我状態を示す。自我状態のエネルギー配分に極端な偏りがあると、心身の平衡状態が乱れ、様々な症状や行動の異常が生じると報告されている¹³⁾。全科、学年においてエゴグラムの平均値は、自他肯定的な健康的なパターンを示した。若林¹⁴⁾は職業レディネスが高い者はこれの低いものよりも、職業志向性も自己評価もともに高く、力強い自己イメージを持つと指摘している。また、職業社会化過程の専門性が高いほど、自己概念と職業意識が強固で明確なものになる、と指摘している。本調査では、M大学においてその傾向が顕著であり、職業的同一性が促進されていると考えられる。しかし、Y大学では差を認めなかった。またK校3年では職業レディネスが低く、エゴグラムの値も低い(ACは逆に高い)という結果から他者に影響を受けやすく自分に自信がない姿が浮き彫りにされた。この結果は職業レディネス結果と関連していると思われる。

エゴグラムと職業レディネス総合点との相関では、Y大学4年生はレディネス得点とエゴグラムのAが正の相関を示し、学生の職業意識の高まりと科学的、論理的傾向の関連が示唆された。しかし、看護師に必要とされるNPとは相関を認めず、実習によって人に関わることの喜びや自分の能力を肯定できる体験が乏しかったことが推測される。K校3年生はレディネス得点とNPで高い相関を示し、看護師になることへの意識が高い者ほど他者受容、共感的態度が高まっているものと考えられる。また、ACとは負の相関を示し、自己否定的構えを有す学生は、他人に庇護されたい、自分の職業人としての自信も揺らいでいるといえる。この傾向はK校1年生、M大学4年生も同様である。

今回の調査では、高い職業レディネスを示す者は自我状態が安定し、対人関係や自己評価も良好であった。また実習体験が社会化の促進に影響を与えていることが示唆された。

3 看護学生の職業社会化について

1970年代、アメリカにおいて看護師の職業社会化のモデルとして、内在化にいたるまでの6段階がHinshaw, A. S¹⁵⁾によって示された。1970年代のアメリカは、看護大学、大学院の設置が進み、看護学士課程入学の学生が圧倒的に増えた時期で、ちょうど現在の日本の状況に酷似している。Hinshawによれば第一段階は「現実に影響されない看護のイメージ」で、これは看護の理想化されたイメージと期待に特徴づけられる。第二段階は「不一致」でイメージしてきたことと現実の違いに気づく。第三段階は「同一視」で、教師や看護師を役割モデルとしてそれと自己を同一視する。第四段階は「役割シミュレーション」でモデルに合わせて役割をシミュレーションする。第五段階以降は新人看護師の体験で「揺らぎ」、第六段階「内在化」である。興味深いのは第二段階から第三段階までの学生の変化である。教育学専攻の学生が実習によって教職への意識が高まったように、実習体験は職業社会化に大きな影響を与えることがわかる。看護専門職を自己に内在化するまでにはまず、これまでの観念的に捉えてきた考えと現実が違うという事実をしっかりと認識すること、そしてその事実を肯定的に受容するためには、学生がモデルとする教師や看護師が必要である。つまり、学生が社会性を備え、専門職に欠くことのできない諸要素を身につけるためには、臨床実習での質の高い経験が最も重要であるといえる。Marcia A. Pitrini¹⁶⁾は現状の大学教育は、臨床教育が講義より軽視されている傾向にあると警告している。学生が看護師像をしっかりと現実のレベルで捉え、社会の期待に応えられるような職業人へと社会化が促進されるためには、教師の臨床能力が益々重要となるだろう。また、現代学生の職業意識を把握し、適性を促せるような関わりが求められていると考える。

おわりに

今回の調査では、看護学生は最終学年の前半期までに職業レディネスは低下することがわかった。看護学生は専門教育や実習体験によって職業的同一性が促進されるというより、むしろ拡散傾向に向かうことが推測された。今後、縦断的調査によりその過程を明らかにする必要がある。また、実習内容の違いがあるが、教育学専攻の学生が実習後に職業レディネスが高く、自我状態も高いスコアを示したことで実習体験の重要性を改めて確認できた。看護教育は今後も高等化しつつあることが予測される。しかし看護は実践でこそ、その価値が認められるのである。教師は臨床場面で、学生が理想とする役割モデルを示すことができるような臨床能力を身につけ、維持していくことが課題である。

引用文献

- 1) Super. D. E. (1953) A Theory of Vocational Development, The America Psychologist, 184-190.
- 2) 若林満他(1983) 職業レディネス尺度, 人間と社会

- を測る・心理測定尺度, 483-488.
- 3) 若林満他 (1983) 職業レディネスと職業選択の構造-保育系, 看護系, 人文女子短大生における自己概念と職業意識との関連-名古屋大学教育学部紀要, 30, 63-98.
 - 4) 新版 TEG 実施マニュアル (2000), 東京大学医学部心療内科 TEG 研究会, 1-21.
 - 5) 新版 TEG 解説とエゴグラム・パターン (2002), 東京大学医学部心療内科 TEG 研究会, 3-23.
 - 6) 若松養亮 (2001), 大学生の進路未決定が抱える困難さについて, 教育心理学研究 49, 209-218.
 - 7) 松下由美子他 (1993), 看護学生の職業的同一性を規定する要因, 教育相談研究 31, 29-45.
 - 8) Marcia, J. E. (1966) Development and Validation of ego identity status, J. Personal, Soc, Psychol, 3, 551-558.
 - 9) 古田土美奈子 (1983), 青年期から成人期の自我同一性に関する研究, 熊本大学教育学部紀要 23, 49-52.
 - 10) 松下由美子, 前掲 5
 - 11) 波多野梗子他 (1993), 看護学生および看護婦の職業的アイデンティティの変化, 日本看護研究学会誌, 21-28.
 - 12) 河村彰美他 (2000), 看護学生における看護婦のアイデンティティ形成と志望理由・学習進度との関係, 京都府医科大学医療技術短期大学部紀要 10, 91-99.
 - 13) 杉田峰康, 交流分析, 精神科診断学, 25-47, 1894.
 - 14) 若林満他, 前掲 2.
 - 15) Hinshaw, A. S., (1981), Socialization and Resocialization of Nurses for Professional Nursing Practice, Menlo Park, CA, 139-141.
 - 16) Marcia, A. Petrini. (2001), Design of Clinical Education and Clinical Teaching, Quality Nursing 7 (11), 97-107.

参考文献

- 1) 鎌 幹八郎, 山本力, 宮下一博, アイデンティティの研究展望, I・II・III, 1995.

Abstract

Study regarding Professional Socialization of Nursing Students

SHIRATORI Satsuki

In this study, research was conducted on first- and fourth-year nursing students, and on first- and fourth-year students in the department of education, aiming to grasp the characteristics of professional socialization of nursing students.

Research was conducted using the vocational readiness scale and the Todai (University of Tokyo) -style Egogram, to see the relations. The results were that, regarding first-year students, those in the nursing vocational school showed the highest values, both in vocational readiness and Egogram scores; as to fourth-year students, those in the department of education showed the highest values in both, also showing a significant difference in variance analysis. The final-year nursing students showed lower vocational readiness and Egogram scores than the first-year students, indicating that vocational identity had not been promoted. It was considered that nursing college students are beginning to consider hobbies and aptitude in a wide range, without limiting their career options to being a nurse.

Vocational school students showed a high tendency toward self-denial, and to be easily influenced by others, due to relations with ego status. Also, the students in the department of education showed high readiness immediately after practical training, indicating that experiencing an occupation in an actual field is important for socialization.

Key words: Nursing student, Professional Socialization, Occupational identity, ego-identity Nursing Education